■マルティナ vs 伝説のホイミスライム

――グロッタの町にて、久々に開かれた仮面武闘会。
そこでは注目のエキシビションマッチが開かれていた。

『さぁ始まりましたエキシビションマッチ……出場選手はこちら！
片や豪脚一閃　美しき女闘士マルティナ！』

闘技場の舞台に上がった途端に観客から悲鳴じみた声援を浴びるのは、肩書きに違わぬ美貌を持つマルティナ。
武闘会の特別枠に選ばれるだけあり、身体には引き締まった筋肉がついているが……
それでいて、道着の上からも見て取れる盛り上がったバスト、筋肉の上に脂の乗った むちむちとした太股は
男性客にとって理想とも言えるプロポーションも兼ね備えていた。
黒く長いポニーテールを揺らし、切れ長の眼で観客たちに向けて視線を上げると、更に歓声が強くなる。

（随分と人気が出たものね……）

自身の人気の高さを客観的に見る女闘士。その内には、大衆の前であることへのプレッシャーなどは一切ない。
幼い頃から鍛錬を積んだ彼女は、その凛とした雰囲気に見合う胆力も持ち合わせているのだ。
心身共に万全のコンディションを維持し、仮面に覆われた切れ長の眼で対戦相手の出場を見届ける。

『対するは――伝説のホイミスライム！』
（え、モンスター？）

――しかし、ここで彼女の表情と精神が揺らぐ。
なんと、相手はクラゲのようなモンスター……
スライムに酷似したぷよぷよとした頭部にいくつも触手が生えた、ホイミスライムだったのだ。
グロッタの町の武闘会では仮装や武器の使用こそ問題ないが……
モンスターが出場するというのは、少なくとも今までマルティナが参加した中ではありえなかったからだ。
しかも相手はそう強くない種類のモンスター。『伝説の』という大仰な肩書きこそあれど、これは何とも異質な組み合わせであった。

『さあ人間ｖｓモンスター！　異例の対戦ですが、マルティナさん今の心境は？』
「え、ええ……正々堂々、戦うわ」
『伝説のホイミスライムさんはどうでしょう？』

司会がホイミスライムにも尋ねる。が……当然、人語を話せるはずもない。
ただし理解はできるのか、身振り手振りで意思を伝えようとしている。

『なるほど、こちらも意気込みは充分なようです！』
（……本当にわかってるの……？）

ハイテンションでノリのいい司会のことだ。
意味が解らずとも会場を盛り上げるために適当なことを言っている可能性もあるが……今はそんなことはどうでもいい。
相手の正体や意思がなんであれ、武闘会で立ち会うからには全力で相手するだけだ。

『普段よりも大勢のお客様にお越しいただいているこの試合、お二方ともぜひ盛り上げてください！　では……』
――試合開始！
（この場に選ばれるってことは、ただのホイミスライムじゃないはず…… 一気に片付けるわよ！）

相手がホイミスライムだろうと油断はしない。開始の合図と同時、マルティナは一気に踏み込んで相手頭部に向けて蹴りを繰り出した。
一流の闘士であっても、対応は困難を極める上段蹴り。
……のはずだが、ホイミスライムは跳ね上がった足がヒットする前に触手で絡め捕る。

「なっ？！」
『ここはホイミスライム上手く捕った！　そして反撃！』

手加減なしの蹴りが容易く止められる。今までにない経験に、流石のマルティナも驚愕の声が漏れる。
その隙にホイミスライムが触手をマルティナの下半身――黒いホットパンツに包まれた股間に伸ばす。
触手……見方によっては男性器にも似たそれが、柔らかな打撃で生暖かい感触を伝えてくる。

「いやっ！　ちょっと、どこを狙って……」
ヴヴヴヴヴッ！
「やめっ！　あぁぁぁぁぁっ！」
『股間への打撃！　更に密着させての震動――！　激しい連打で股間をめった打ちだ――！』
「あぁっ……くぅっ！　こ、こんなのアリなの？　っ……はぁぁぁっ♥」
『脚を掴まれ抵抗できないマルティナ　股間が攻撃されるのを晒し続けるしかないのか？！　声が少しずつ甘くなっていく――！』

気味の悪さから離れようにも、更に触手がマルティナの対応速度を超えて巻き付いていた。
脚……むちむちの太股や、締まったウエスト、
たっぷり実ったバストにも触手が絡み付いて逃げ出せず、股間に触手の振動を当て続けられる。
震動で胸と太股が妖しく震え、更に仮面もずれ落ちる。
好奇と憧れの的である女闘士の思いがけない劣勢に、絶世の美貌も露わになったことで男性客が湧き立った。

（こんな攻撃をしてくるなんて……くぅっ♥　大勢の人たちの前なのに……っ♥）

急所どころか性器への攻撃。人間同士の対戦であれば反則扱いになってもおかしくないが、司会は一切止めず、逆に観客を煽り立てていく。
そしてこんな状況にも関わらず、マルティナの身体は性器を攻撃されて早くも高揚していた。
無論、マルティナが衆人環視の中でみだらな行為に耽る嗜好を持っているわけではない。
触手攻撃はホイミスライムが得意とするホイミを調整しているのか、攻撃でありながら魔力による快感を与えてくる。
しかも触手そのものの柔らかさと震動の加減が絶妙であり、僅かな間にもマルティナの中の牝を炙り出しているのだ。

（こんな相手に、やられるわけには……いかないっ！）
「このっ、あっ♥　……っっ！」

対戦相手に翻弄され、しかも快感を与えられるなど、そんな屈辱をマルティナの高貴な精神がは耐えられるはずもない。
手で身体に巻き付く触手を掴んで剥がす。が、胸に巻き付いた触手を勢いよく引き剥がした拍子に触手で胸と乳首をひっかいてしまい、
鋭い快楽に思わず甘い吐息を漏らしながら、それでも気合で強引に身体を解放させ、、無理矢理に蹴りを入れる。

『触手が乳首に当たったか？　マルティナ喘ぎながらもサマーソルト！　ホイミスライムの頭部に渾身の一撃――！』

宙返りしつつの蹴りを浴びせ、その威力に触手の締め付けも緩む。
どうにか触手攻撃から抜け出したマルティナだったが……単純なダメージはともかく、性的なダメージは大きかった。

（身体に、チカラが……入らない……っ）

思いがけない部位へのダメージと快楽。それが身体の動きを止めてしまう。
だが、それでも蹴り続けるしかない。矜持と自尊心で快楽の屈辱を跳ねのけ、再び踏み出したが――相手の回復の方が僅かに早かった。
頭部へのダメージから回復したホイミスライムが、マルティナの攻撃よりも早く触手を伸ばす。

「やぁぁっ！」
『再び動いた両者！　触手と蹴りが無数にぶつかり合う――！』

向かってくる触手をどうにか蹴りで迎撃する。
人間の脚に比べて多い触手に対抗すべく、脚を上下左右に薙いで攻撃面積を増やすことで触手が近付かせない。
そして触手が重なった部分を狙い渾身の蹴りを入れた時、触手全体が弾け上がる。

（今よ！）

針の穴の如き僅かな隙。そこに勝機を見出したマルティナだったが……

「そ、そんなっ？！」

　隙を突いた攻撃を仕掛けた瞬間、一瞬で触手が戻り、蹴りに絡み付く。
その一瞬で理解させられる。触手が弾き飛ばされたのは、ギリギリの間合いから一歩踏み入れさせるためにわざと作った隙なのだと。
意図的に隙を作り、逆転の可能性を見せての圧倒――ここまでの展開がホイミスライムの思惑通りであった。

「あ……このっ！　離しなさいっ！」
『マルティナの片脚が、そしてもう片方の脚も捕まってしまったぁ！　そして、これは――！』

左脚が完全に捕まり、拘束する触手を払おうとした右脚も絡め捕られる。
既に上半身も絡め捕られており、完全に身体の制御を奪われた次の瞬間、身が宙に浮きあがり――

「い……いやぁぁっ！」

マルティナは逆さにされ、そのまま大きく開脚させられる。
――恥ずかし固め。その名で知られる技に酷似した拘束をかけられ、あられもない姿を見せてしまう。

『これは……変形の恥ずかし固めかっ？！　マルティナの脚が大きく広げられ！　無抵抗に広がる下半身が！　股間が！
大勢の観客たちにお届けされる――――！』
「いやっ！　やめて……見ないでぇぇっ！」

予想もつかない体勢に、悲鳴を上げて訴えるマルティナ。
しかしホイミスライムがやめるはずもなく、むしろ更に脚を開き、股間をせり出させ、
更に体勢をそのままに掲げ上げることで観客に見せ付けていく。
マルティナが穿いているのはホットパンツとはいえ、サイズはキツめでスパッツやショーツに近い。
股間の形も比較的 明瞭に映し出してしまう。
それでもよほどのことがなければ、形が見て取れることはないのだが……今は苦戦で汗ばんだことで衣服が肌に張り付き、
更に限界まで開脚させられることで、女性の形状がくっきりと浮き出てしまっているのだ。
対戦におけるダメージのみならず観客すら利用した辱めに、マルティナは顔を朱くしてジタバタともがく。
だが宙に浮かされては抵抗力など無に等しく、むしろ大振りの胸と太股、尻肉を揺らして男の眼を愉しませるのみだ。

「ふざけないでっ！　こんなマネ……や、やだっ♥　見ないでぇぇ……っ♥」
（何なの、これ……♥　こいつの魔力が、沁み込んで♥　身体がまた……熱くなっていく……っ♥）

ホイミを応用した、快感を与える魔力。最初に与えられたそれが、身体に巻き付いた触手全体から発せられていた。
たちまちマルティナの全身が心地よい感覚――性の興奮に再び侵され、昂ぶって熱を帯びていく。
しかも今度は魔力を身体中に密着した状態で与えられているためか、効き目は前回の股間責めよりも強烈。
いつしか悲鳴も甘く蕩け、大衆の前にも関わらず高揚するシチュエーションが、
マルティナに『視線を浴びて興奮している』とさえ錯覚させる。

『まさかマルティナ、この状況を愉しんでいるのか？！　……と、そこで更にホイミスライムが股間に追撃か――！』
「ち、違うわ！　こんなの、愉しんでなんて……ちょっ、なにをっ？！」

恥辱的な扱いを否定するしかできないマルティナ。そこへ加えて別の触手が動きを見せる。
大勢が注目するマルティナの股間部に、ゆっくりと先端を近付け――微量の粘液を帯びるや、またもマルティナの股間に密着する。

「ひゃぁっ♥　や、やめ……う、ウソっ！　いやぁぁぁぁっ！」

既にぷっくりと火照った外性器を刺激され、強い快楽が奔るが――その快楽すら、すぐに消し飛んだ。
粘液の効果なのか、なんとホットパンツの触手に触れられた部分が溶かされているのだ。
誰もが憧れる美女闘士の秘部。
しかも魔物の魔力のせいとはいえ、ぐっしょりと濡れそぼったものが遂に露出されたことで会場のテンションが爆発する。

『なんということだ！　マルティナの大事な部分の衣服が破け……いや、溶かされてしまった――！
露わになった女性器！　まさか、このまま最後まで致してしまうのかぁぁ――――っ？！』
（最後までって……冗談でしょっ？！）

秘部が曝け出された後、考えられる最悪の展開が容易に思い浮かぶ。
羞恥に悲鳴を上げる余裕もなく、恥も高貴さもかなぐり捨てて手足を暴れさせるが、やはり効果はない。
小さく震える股間に、一本の触手……他のものより一回り太くなり、まさに勃起した男性器そのものとなった肉幹が近付き、鎌首をもたげさせた。

『いかにも硬そうな太い触手が、露わになったマルティナの大事な部分に近付き……遂に……？！』
「っ！　させない……！　それだけは、絶対に――！」

既に武闘会での試合としては必要以上の恥辱を受けたが……ここから先だけは、許すわけにはいかない。
マルティナは余力を振り絞り、闘気と魔力を唸らせて手足に力を込める。
強引に腕を解放させ、右手で股間に近付く肉幹を、左手で身体に巻き付く触手を掴み上げ、ギリギリと音を立てて捩じ上げ――

ずぷっ♥　じゅるるるっ♥
「んはぁぁっ♥」

体験版はここまでです。続きは製品版で！